

# 閉じた窓、開いた窓

——『ジェイン・エア』試論——

渡 辺 美 樹

Charlotte Brontë の代表作、*Jane Eyre*<sup>(1)</sup> は1847年に出版された。この小説は主人公ジェイン・エアが Mr. Edward Rochester との結婚に至るまでの前半世を顧みるという一人称語りの形式をとっている。<sup>(2)</sup> そのためにこの小説は主人公ジェイン・エアの精神の発達を主題とするという観点から評価され続けている。<sup>(3)</sup>

この小説の中で主人公ジェイン・エアは幽閉と逃亡を繰り返しながら、Gateshead Hall, Lowood Asylum, Thornfield Hall, Moor House, 及び Ferndean Manor という異なる五つの建物に転転と移り住む。この建物の名称には John Bunyan の *Pilgrim's Progress* で言及される Vanity Fair という名称のように寓意的な意味が込められている。そのために精神の発達をこの小説の主題として考えるとどうしても建物はジェインの試練の場として認識されるだけである。<sup>(4)</sup>

ところが生まれてまもなく孤児となったジェインは「家なき子」である。ジェインにとって彼女の移り住む五つの建物は彼女の精神の発達を促す単なる試練の場ではない。彼女にとってその建物は第一義的に自分を保護してくれる家であるはずだ。ゲイツヘッドの女中、Bessie が 'Heaven is a home, and a rest will not fail me; God is a friend to the poor orphan child.' (p. 18) とジェインに歌うみなし児の歌のように天国を自分の家とする孤児の前途には死があるだけだ

からである。ジェインが生存するためには彼女の住む建物は何はさて置き彼女を保護する家でなければならない。

それ故に家の機能を考慮に入れてこの小説を「家なき子」ジェインの家捜しの物語と考えることもできる。家捜しの物語と考えれば、「家」を構成するのは家族であるから、結婚は家を獲得する手段であるし、血縁に当たる Rivers 一家の住むムア・ハウスを偶然見つけるのも何ら不自然ではない。ジェインがわが家として求めたこの五つの建物をもつと前景化して考える必要がある。

構造上、家<sup>(5)</sup>とは無秩序な外部である自然に対して特別に組織された内部空間である。壁が外部を遮断して空間を家の内と外に分割しているからである。その家には構造上空間を内と外に分割できない窓が必ず存在している。wind と eye の合成語である window が本来「風の通り路」の意であることからわかるように窓とは外を遮断できない仕組みをもつものである。つまり窓とは家の内と外の境界となる空間である。

『ジェイン・エア』に出てくる建物の一部分である窓はこの小説の中で特異な地位を占めている。窓が家の真中にあるのではなく、家の片隅にあるために主人公ジェインの「家」の中での地位を示すことができるためである。そのうえ、窓が家の内と外の境界となる空間であるためにジェインにとって窓は「通り路」となるのである。

主人公ジェイン・エアが最初に語るのはゲイツヘッド屋敷での子供時代に経験した憤怒の感情である。十一月のある雨の降る寒い日に客間の暖炉の前で Reed 家の人々は一家団欒を楽しんでいる。ところがリード伯父の遺言で家族の一員として扱われなければならないはずのジェインはよい子ではないという不当な理由でその一家団欒の場から締め出されてしまう。そのためジェインが breakfast room の window seat に避難所を求めた場面からこの小説は始まっている。

ジェインの回想が窓下腰掛けから始まるのは彼女が孤児であるためにリード

家の人々から疎外されているという事実を初めて心的外傷として自分の心の中で受けとめたからだと考えることができる。そのためにそれ以後リード家の人々に対する反抗と怒りの記述が続くのであろう。ジェインにとって窓下腰掛けは自らが自覚した心的外傷体験を想起させる「原風景」であると言ってもよい。それ故に窓がジェインの意識に何度ものぼってくるのである。

また窓下腰掛けは前述したように家の内と外の境界となる空間である。リード家の一員として認められなかったジェインが窓下腰掛けに座するのは彼女の屋敷内での立場を示している。孤児であるために家族の構成する「家」に加わることができないジェインは家の片隅にある窓にしか自分の居場所を求められない程疎外されているのである。

ジェインが内と外の境界である窓下腰掛けに逃げ込まざるを得ないのはリード家の女中の Abbot の言動からも推測できる。アボットによれば、衣食住を全面的にリード家に依存する居候のジェインは召使い以下の存在なのである。また反抗的なジェインを 'bad animal' (p. 7), 'rat' (p. 8, p. 9), 'mad cat' (p. 9) や 'little toad' (p. 20) のような人に嫌われている動物に喩えるのはやはりジェインを召使い以下の存在として考えているからであろう。それ故にジェインは 'the scapegoat of the nursery' (p. 13) なのである。

このようにゲイツヘッド屋敷ではジェインのことを誰もリード家の一員として認めていない。家族の一員として容認されていないジェインはゲイツヘッド屋敷の内にながら、その内に所属する人間ではない。つまり家の中に存在しながら、その内に属していないというパラドックスが成立しているので、ジェインは内と外の交錯する窓下腰掛けに自らの身の置き処を求めたのである。

その窓下腰掛けの上でジェインは胡座を掻いて坐っている。家人に見つかるのを恐れて深紅のカーテンを引いたジェインの視線は家の内部へ向けられていない。リード家の人々から疎外されているから家の内部へ視線を向けないだけなのかも知れないが、ジェイン自身も家の内部の世界を拒絶しているからであろう。ジェインは視線を家の窓の外に広がる冬の物寂しい風景に少しだけ投げかけてから、Bewick の *History of British Birds* という図鑑の挿絵に眼差しを向

けていく。現実の窓の外の風景よりもはるかに厳酷な自然を描いた図鑑の挿絵を眺めながら夢にふけるのである。

Nor could I pass unnoticed the suggestion of the bleak shores of Lapland, Silberia, Spitzbergen, Nova Zembla, Iceland, Greenland, with 'the vast sweep of the Arctic Zone, and those forlorn regions of dreary space — that reservoir of frost and snow, where film fields of ice, the accumulation of centuries of winters, glazed in Alpine heights above heights, surround the pole, and concentrate the multiplied rigors of extreme cold.' Of these death-white realms I formed an idea of my own: (p. 6)

ジェインは死を暗示する荒々しい自然界、つまり家の外の世界に思いを廻らせているのである。

以上のことからジェインにとって家の内は家庭を家の外は死を示唆すると換言することができる。窓の外はビューックの挿絵が暗示する死の世界であるので、ジェインは外に出て行くことができない。ジェインはそのため家の内にも外にも属することができずに内と外の境界である窓下腰掛けに座すのである。

この窓下腰掛けは一時的に窓ガラスやカーテン等に囲まれた安全な空間になっている。ゲイツヘッド屋敷で自分の部屋もないジェインにとって唯一プライバシーの守れる空間になっているのである。そのためにジェインは夢にひたることができるから、彼女にとって窓下腰掛けは自閉的な空間でもある。窓下腰掛けは彼女の自我を育むことのできる空間と言うこともできよう。

窓の外の世界に視線を投げかけたジェインはゲイツヘッド屋敷の外の世界に出て行きたいという衝動を秘めている。成人するまでゲイツヘッド屋敷を離れることはできないと思っていたジェインにLloyd 薬剤師が二つの可能性を明らかにする。一つは父方の親戚に引き取られることであり、もう一つは学校に預けられることである。

リード伯母の冷淡な言い回しからジェインは父方の親戚を労働者階級に属す

る貧しい人々であると誤解し、自分を扶養する能力はないと考えた。つまりジェインは牧師の娘の属する紳士階級から労働者階級に自分の地位が転落するのを恐れて父方の親戚に引き取られる道を選ばなかったのである。ジェインは学校に行くのを選ぶのである。

ジェインの自閉的空間となるゲイツヘッド屋敷の窓下腰掛けとは異なる機能を果たす窓がこの小説には出て来る。家の内と外の境界である窓がジェインの家の外へあるいは家の内への通路となるのである。この例としてジェインのゲイツヘッドからローウッドへの移動を考えることができる。つまりジェインが窓の外を見た時に目撃した Mr. Blocklehurst が彼女をローウッド慈善学校に連れて行くことになるから、彼女の窓を視るという行為が空間的移動を引き起こすと解釈できるのである。

ジェインはローウッドに紳士階級の女性にふさわしい教育を受けようと思って赴くのであるが、実際にローウッド慈善学校はヴィクトリア朝の parlour に陣どる perfect lady を養育する機関ではない。ローウッド慈善学校はいずれ社会に働きに出て行かねばならない孤児を養育する機関である。ジェインの友となる Helen Burns が奇しくも述べているようにローウッドは家のない子供の集合体であるから、ローウッドは孤児院なのである。事実、ヘレン自身が父親の再婚によって家を喪失し、天国を home と考えていることからわかるようにローウッドは孤児を教育する一種の孤児院なのである。

ゲイツヘッド屋敷で家の内にいながら、内に所属していなかったジェインにとって屋敷内での彼女の居場所は内と外の交錯する窓下腰掛けという家の片隅であった。自らを保護してくれる家をもたない孤児たちにとってローウッド慈善学校はゲイツヘッド屋敷の窓下腰掛けと同じ機能を有している。ローウッドは家の外にも内にも属することのできない子供たちの一時的な避難所だからである。また窓下腰掛けと同様にローウッドも内と外の境界であるために通常は家の外の世界に属する飢餓や酷寒や病いがローウッドで猛威をふるうのである。

ジェインにとってローウッドがゲイツヘッドの窓下腰掛けと同質の空間であることは休暇中に彼女が描く三枚の絵として表現されている。後にソーンフィールド屋敷でロチェスター氏にみせることになるその絵は死を暗示する極地、難波船と溺死体、及び山頂の女性を描いたものであった。その三枚の絵はゲイツヘッドの窓下腰掛けでジェインが眺めていたビューICKの挿絵の翻案である。<sup>(6)</sup>このことはジェインの精神状態がゲイツヘッドと全く同じであることを示唆している。

ジェインの内に潜む家の外の世界へのあこがれは彼女の慕う Miss Temple の結婚と辞任に伴う出立で具体化される。ジェインはローウッドの自室の窓から外へ視線を向けるのである。

I went to my window, opened it, and looked out. There were the two wings of the building; there was the garden; there were the skirts of Lowood; there was the hilly horizon. My eye passed all other objects to rest on those most remote, the blue peaks : it was those I longed to surmount; all within their boundary of rock and heath seemed prison-ground, exile limits. I traced the white road winding round the base of one mountain, and vanishing in a gorge between two : how I longed to follow it further ! (p. 74)

このようにジェインは少しずつ遠くへと視線を延ばしながら、次第に未知の世界に対するあこがれを強く意識するようになるのである。

内と外の交錯する窓辺で窓の外をジェインが眺めることは窓が通り路となって彼女の家の内から外への通行を可能にしている。その後実際にジェインはローウッドからソーンフィールドに行くことになる。ジェインは窓の外を眺めている間に女家庭教師となってローウッドの外の世界へ出て行くことを決心するのである。このように語り手ジェインが窓辺で自らが外を見るという行為を記述すると彼女の内から外への通行が可能となるのはジェインが外の世界に対

して願望を抱いていつも窓の外を見ているからである。

ソーンフィールド屋敷に赴いてからも屋上から地平線の彼方を眺めたりして彼女の視線は絶えず家の外に向けられている。そういうジェインが退屈凌ぎに村の郵便局にお使いに出かけて行ってロチェスター氏と遭遇したのである。ジェインが外の世界に対して願望を抱いて窓の外を眺めていたので、ロチェスター氏が登場することになったと考えることもできる。それ以後ジェインの視線は屋敷の外ではなく屋敷の内側に向けられるようになる。その理由は二つ存在する。ジェイン自身が確固たる家父長の支配する家に住んだことがないためであるし、また屋根裏に潜んでいる狂女が彼女の分身であるがために彼女を引き付けるからである。

着任当初、ジェインは家政婦の Mrs. Fairfax を屋敷の女主人、教え子となる Adèle をその娘であると勘違いをしていた。ソーンフィールド屋敷はロチェスター氏が帰省するまではそのような錯覚に陥りたくなるほど単に人を寄せ集めただけの屋敷であった。ところが、ロチェスター氏の帰省に伴って屋敷内は彼を頂点とするヒエラルキーが成立するのである。

このことがジェインの注意を喚起するのは今までジェインが暮らしてきたゲイツヘッドやローウッドでは家の中心となる人物が不在であったからである。

ゲイツヘッドをリード夫人が取り仕切っていたが、一人息子のジョンは彼女の命令を聞かない子であった。リード夫人自身は家父長であった亡夫のジェインに関する遺言を遵守していないことを気にかけていた。ゲイツヘッドでは家父長が故リード氏なのか、リード夫人なのか、それとも一人息子のジョンなのか、明確にされていない。そのためゲイツヘッドでは家父長的なヒエラルキーが成立していないのである。

ローウッド慈善学校でもその家の中心は不在であった。舎監をしているテンブル先生が校長先生であるが、この学校の実権を掌握しているのは嫌われ者のブロックルハスト氏であった。家父長に当たるブリックルハスト氏は時折視察に来るだけであるし、彼の命令は必ずしも守られたわけではないから、ローウッ

ドでも家父長的なヒエラルキーは成立していなかったのである。

そのために一層ジェインの眼差しはロチェスター氏を中心とする屋敷の内側に向けられるのである。このことは近隣の紳士・淑女が屋敷に滞在した時にロチェスター氏から客間に接待されたジェインがとる行動で明確にされている。ジェインはお客のいない時に客間にこっそりとはいっていき、人目につかない窓下腰掛けに本を片手にして坐るのである。ゲイツヘッドの窓下腰掛けではジェインは図鑑の挿絵を眺めることでその空間を自ら閉ざしてしまっていた。ところが今回は窓下腰掛けのカーテンの蔭に隠れてロチェスター氏とそのお客の観察を毎晩行なっているのである。ジェインは窓下腰掛けを自閉的空間にせず家の内に向かって開くのである。彼女は客間で演じられているロチェスター氏主役の求婚ゲームを眺めているのである。

しかしながら、ジェインがゲイツヘッドの時と同様に内と外の混淆する窓下腰掛けに坐るのは自らが疎外されているという心的外傷を追体験しているからである。ジェイン自身にはわからない理由から彼女はソーンフィールド屋敷の内側に属する人物となれないのである。つまりソーンフィールド屋敷の内側に組み込まれる人間ではないので、ソーンフィールドでロチェスター氏との結婚が成立しないと言うことができるのである。

ジェインの坐る客間の窓下腰掛けは彼女がソーンフィールド屋敷の内からも外からも疎外されていることを示している。まずジェインが客間に招待されるのは彼女が労働者階級に属する単なる奉公人でないことを示唆する。実際にロチェスター氏が招くのは遠縁に当たる家政婦のフェアファックス夫人と女家庭教師のジェインだけである。屋敷の主人であるロチェスター氏からフェアファックス夫人同様にジェインも客間に招待できる身分にあることを認められている。つまり二人とも紳士階級に所属しているのである。

ところが客間の窓下腰掛けから客間に視線を注ぐことはしても、ジェインはその席をたって客間で催される遊びに参加することはない。彼女は紳士・淑女階級の一員として容認されていても、自分たちの仲間として彼らから受け入れられていないからである。Ingram 家の人々は女家庭教師となる人々を非難す



る発言もしている。結局のところいくらジェインが牧師の娘であっても女家庭教師として働いているために近隣の紳士・淑女から疎外されているのである。<sup>(7)</sup>

客間の窓下腰掛けが暗示するジェインの立場の曖昧性は彼女が女家庭教師であることに起因する。ゲイツヘッドでは孤児であるが故に屋敷の内にも外にも所属できなかったが、ソーンフィールドでは女家庭教師であるが故に屋敷の内にも外にも所属できないのである。つまり女家庭教師という職にあるため屋敷の外に住む紳士・淑女から疎外されたように屋敷の内に住む人々からも疎外されるのである。そのために家の内と外の混淆する客間の窓下腰掛けにジェインは坐ることになったのである。

ソーンフィールド屋敷の内側に存在しながらジェインだけが屋敷の内側に所属する人間ではないのは彼女の職業が女家庭教師であるからである。ロチェスター氏が女家庭教師に応募する者が全くなならないようにするために家人に屋根裏にいる狂女の秘密を守るよう厳命したからである。そのためにこの秘密を知らないジェインの立場は屋敷の外の人々と同じである。彼女は女家庭教師であるが故に屋敷の内にながら、その内に属することができないのである。

屋敷の内に所属したいという願望があるから、ジェインは屋敷の内側に目を向けているのである。このジェインの願望はソーンフィールドの内側に所属できない原因、つまりロチェスター氏の気狂い妻の存在を明らかにする。ジェインが財産のある独立した女性になろうとして書いた伯父あての手紙がソーンフィールドの秘密を暴くことになるからである。ロチェスター氏と結婚することで家の内に属する人物となることを望んだジェインの希望は踏み躪られてしまう。そのため窓からさしこむ月の光に誘われて強引にソーンフィールドから逃亡するのである。

ジェインがムア・ハウスに辿り着くのはつたが繁っているためにカーテンをつけていない台所の格子窓からろうそくの明かりがもれるからである。この家の中からもれる光がジェインを家の中へと導いてくれる。

The light was yet there : shining dim, but constant, through the rain. I tried to walk again : I dragged my exhausted limbs slowly towards it. It led me aslant over the hill, through a wide bog; which would have been impassable in winter, and was splashy and shaking even now, in the height of summer. Here I fell twice; but as often I rose and rallied my faculties. This light was my forlorn hope : I must gain it. (p. 291)

後に 'my star' (p. 291) と表現されるこの光がジェインを家の外の世界から家の内の世界へと導くのであるから、内と外の交錯する窓がジェインの家の外から内への通行を可能にしていると換言することができる。つまり窓がジェインの通り路となるのである。

ジェインの辿り着いたムア・ハウスは彼女の父方のいここに当たるリヴァーズ兄妹の家である。ジェインの視線が家の内側を向いているために彼女は伯父の遺産をいとこたちと均等に相続することを選ぶ。つまり結婚することで家の内側に属する人間になろうとするのではなく、遺産を平等に分けることでリヴァーズ家の三番目の娘として家の内側に属する人間になろうとしたのである。

ジェインの視線は家の内に属する人間になりたいという欲望をはらみながら、ムア・ハウスでの一家団欒に向けられている。ところが St. John Rivers の視線は家の外へ向けられている。セント・ジョンはパーラーの窓際でインド布教のための勉強に勤しんでいる。ヴィクトリア朝の小説の様式では通常兄妹として交際する二人組みは結婚することになる。<sup>(8)</sup> ムア・ハウスでジェインとセント・ジョンの結婚が成立しないのは二人の視線の方向が逆であるために二人の希望とすることが違っているからである。セント・ジョンの外への視線は彼が「天国という真の永遠の楽園」(p. 324) を希求していることを表わしている。セント・ジョンにとって結婚は楽園とは関係のないものである。

ところがジェインの家の中へと収束する視線が希求しているのは結婚という

名の地上樂園であると思われる。つまりジェインにとってロチェスター氏の情婦となるのは 'a slave in a fool's paradise' (p. 316) となって一時的に結婚という樂園願望を満たすことなのである。また中断された結婚式の後でジェインがソーンフィールド屋敷を 'lost paradise' (p. 306)、そしてロチェスター氏との結婚そのものを 'lost elysium' (p. 310) として考えていることは彼女自身が結婚を 'paradise of union' (p. 224) として認識し、その結婚生活の場となる家を樂園として考えているからである。

樂園とは本来囲われた空間である。<sup>(9)</sup> そのため樂園は求心的構造をもつ。樂園は外から内へはいることもできなければ、内から外へ出て行くこともできないような閉鎖的な空間なのである。ジェインがロチェスター氏との愛情のかよいあった結婚を樂園にたとえるのはお互いの視線が眼の中に収束されていくような求心的な構造が二人の結婚にあるからである。勿論、神の前での結婚という契約は他の人のはいりこめないような神聖かつ閉鎖的な約束であることは言うまでもないことだろう。

セント・ジョンとジェインの結婚が成立しないのは二人の視線がはらむ欲望が異なっているからであるが、ジェインに天啓のようにロチェスター氏の呼び声が聞こえてきたためでもある。このロチェスター氏の呼び声はファーンディーン屋敷の開いた窓からカーテンのないムア・ハウスの窓を通して聞こえてきたものであると考えることができる。カーテンのない窓からさしこむ月光の光でムア・ハウスの部屋がろうそくのいらぬほど明るかったことはロチェスター氏の呼び声もまた窓を通してはいってきたと考えてもよい証拠となろう。ジェインは以前と同様に窓を通り路としてムア・ハウスからファーンディーン屋敷へ移動するのである。

ムア・ハウスの窓からもれる明かりがジェインをムア・ハウスに誘き寄せたようにファーンディーンの窓からの呼び声が彼女をファーンディーン屋敷へと誘き寄せる。ジェイン自身は 'the messenger-pigeon flying home' (p. 327) のようにロチェスター氏のもとへ急ぐのであるが、ソーンフィールド屋敷は廃虚と

化し、ロチェスター氏の居所もわからない。宿屋の主人の話でロチェスター氏がファーンディーンにいることはわかって、馬車では屋敷の入り口までしか行くことができない。彼女は右往左往しながらファーンディーンへ赴くのである。

黄昏時にファーンディーンの屋敷の入り口に到着してからも、ジェインはいろいろな困難にめぐりあう。屋敷が生い茂る木にはばまれてどこにあるのかわからないし、暗くなっていることもあって迷子になったような錯覚に陥るのである。

以上のようなさまざまな困難に拒まれながらジェインはやっとの思いでファーンディーンを発見する。ファーンディーンは森の真中にある屋敷であるために容易に人が近づき得ないのである。またロチェスター氏が Bertha の健康を考えてこの地に彼女を幽閉するのをやめたほど人の住むには不向きな場所なのである。この人里離れた森の中にある「しだの生い茂る谷間」を意味するファーンディーンという名称が暗示するようにファーンディーン屋敷は囲われた土地でもある。ファーンディーンは楽園となる空間的特色をもった屋敷とあると言ってもよい。<sup>(10)</sup>

ファーンディーンが異質な空間であるのは単に地形的な特色のためだけではない。ファーンディーンはジェインが到着してからますます外の世界に対して閉鎖的になってしまう。つまり今までジェインの外の世界への通路となっていた窓に対する記述がなくなってしまうからである。ジェインは窓の外の世界、つまり家の外に視線を投げかけることをしないのである。ジェインの視線はファーンディーンの内部へ向けられたまま、家の中へ収束していく。そのためファーンディーンはジェインの意識のうえでも閉ざされた、求心的な構造をもつ空間となっているのである。

ファーンディーンのこの閉鎖性は二人の結婚に楽園願望が含まれているからである。ジェインの楽園願望と同様な願望がロチェスター氏の心の中にも存在する。ロチェスター氏がジェインに提案する終のすみかは島であったり、月の世界であったりする。ロチェスター氏は他人がやってこない所でジェインと二

人だけで暮らすことを考えているのである。ロチェスター氏の楽園願望はバーサ・メイソンとの結婚が失敗であったうえに、狂人となった彼女と離婚もできないため現実から逃避しようとする側面を含んでいる。このような楽園願望をもつ二人が結婚したためにファーンディーンは囲われた楽園として心理的にも外の世界に対して閉ざしてしまうのである。

ファーンディーンは楽園であるために外の世界の侵入を拒絶すると同時に内から外へ出て行くことも拒絶している。盲目で不具となったロチェスター氏は楽園のもつ豊饒性という特質のために視力を回復する。また二人の間には子供も生まれる。ところが今までジェインの外の世界への通路となってきた窓がジェインの意識にのぼってこない。そのために外へ出て行くことはできないであろう。社会から孤立して隠遁生活を送る二人にとってファーンディーンは二重に門をかけられている「監獄」でもある。

『ジェイン・エア』では建物の内にある窓がジェインの通路となっている。語り手ジェインが窓に関する描写を行なうとジェインの視線の方向へと彼女自身が移動していくことになる。ジェインの視線が心の内奥にある満たされない欲望をはらんでいるからジェインは移動していくのであろう。孤児であるため生まれつき「家なき子」であるジェインの満たされない欲望とは家の内側に所属することであった。その欲望のためにジェインは結婚という楽園を捜し求めたのである。ジェインにとって自分の住む家が囲われた楽園でなければならなかったのはやはり「家なき子」であったからであろう。

#### 注

- (1) *Jane Eyre* の引用はすべて、Richard J. Dunn, ed., *Jane Eyre* (1847, rpt. New York: Norton, 1971) による。
- (2) Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (Glasgow: Oxford Univ. Press, 1956), pp. 298-299.

- (3) この点について最近の重要だと思われるものだけ挙げておく。

Patricia Beer, *Reader, I Married Him: a Study of the Women Characters of Jane Austen, Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell and Gorge Eliot* (London: Macmillan, 1974); Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: the Woman writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1979); Helen Moglen, *Charlotte Brontë: the Self Conceived* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1984); John Maynard, *Charlotte Brontë and sexuality* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984).

- (4) Helen Moglen, p. 145. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, pp. 339-371.

- (5) 家や窓の概念については以下の書物を参照している。特に多木浩二による『生きられた家』を参照している。

Claud Levi-Strauss, *Anthropologie Structurale* (Paris: Plon, 1958); Thomas A. Seveok, *The Play of Musement* (Bloomington, Ind.: Indiana Univ. Press, 1982); ガストン・バシュラール、岩村行雄訳、『空間の詩学』(東京:思潮社、1969); 多木浩二、『眼の隠喩』(東京:青土社、1982)、pp. 43-86; 多木浩二、『生きられた家』(東京:青土社、1983).

- (6) David Lodge, *Language of Fiction* (New York: Columbia Univ. Press, 1966).

- (7) M. Jeanne Peterson, "The Victorian Governess: Status Incongruence in Family and Society", *Victorian Studies*, 14(1970)7-25.

- (8) Q. D. Leavis, "Introduction to Jane Eyre", *Jane Eyre* (1847, rpt. Harmondsworth: Penguin, 1966), p. 23.

- (9) この辺の事情については川崎寿彦、『庭のイングランド』(名古屋:名古屋大学出版会、1983); 川崎寿彦、『楽園と庭』(東京:中公新書、1984)が詳しい。

- (10) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, pp. 369-370.